

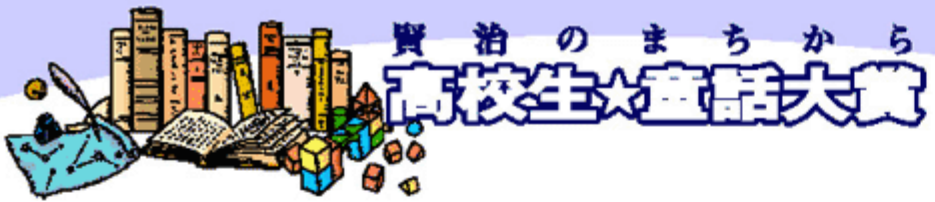
第16回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「本の虫」

神奈川県 カリタス女子中学高等学校一年 小山 夏子



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『本の虫』

神奈川県 カリタス女子中学高等学校一年 小山 夏子

「まただ……」

教室に入った途端とたんに感じる陰気な視線と重い空気。それまで賑やかだった空間が一瞬、無になる。私の皮膚細胞ひぶにひんやりとした針が刺さる。席に着くと私は本を出す。私に話しかける人はいない。

学校で私が唯一いられる図書室へ入ると、鼻から思いっきり空気を吸って目を閉じ、口から細く長く息をゆっくり吐いた。空気の流れが皆無の、この空間にある本の匂いが好き。私にとって本の香りは究極の癒しいよ。だから本に囲まれた図書室でのブックテラピーは欠かせない。

私が友達と距離を感じたのは、スマートフォンが世に出始めてすぐだった。私も同時期に折り畳み式の携帯電話からスマホへ変更した。でも使いこなせなかった。常に返信を求められるスピードにもついていけなかった。絵文字やはんこのようなイラストには、違和感どころか寒気を感じた。なぜ言葉を使わないで、絵で伝えられるの？そんなの方程式を解くより難しい。私には無理だった。友人とのコミュニケーションツールが使いこなせないのは自己責任。だから私は、はじかれた。でも寂しいとか辛いとか感じなかった。なぜなら私には本があるから。

私は小さい頃から本が好き。知らない世界や出来事に出会えるし、登場人物を想像したり、行ったことのない場所に行けたり。とにかく本のおかげで退屈しない。それに本は私を裏切らない。だから私は本が好き。

「藤原さん、新着本、持っていく？」

図書室の先生が、沢山の本を抱えて来た。

「あ、はい。ありがとうございます」

今日学校で初めて声を出したな。

「なんだか空が暗くなってきたから、気をつけて帰りなさいね。良い夏休みを！」



先生は手短かに話すと、新着本を私に渡した。

外に出て空を見上げると、雲が厚くなってきた。当分、学校に来なくていいと思うと、暗い空とは違って晴れやかな気分だった。

次の日から私は、祖母の家に帰省した。

都心の我が家と違い、同じ市内でも祖母の家は山にある。周囲を険しい山々に囲まれ、合掌造りの藁葺き屋根の家が並ぶ集落。その中でも大きな木に囲まれた家が、祖母の家だ。

私はこの家が好き。ここで一人暮らしの祖母も好き。この家が好きな最大の理由は、屋根の形だ。本を開いて伏せたような形状なのだ。古来の原風景が広がるこの地と、日本特有な藁葺き屋根の家。たまらない。だから学校がない日、私はここで過ごすしている。

外門を過ぎて玄関へ向かうと、犬がいた。

「おかえり。楓」

武蔵がそう言った、いやそんな気がした。武蔵と私は以心伝心していると思っっている。

「おかえり。プリン、作ったけど食べる？」

祖母は純日本家屋に住んでいるイメージと違って、洋食や洋菓子を作るのが得意。家の周りの畑は、バジルやミントといった西洋ハーブでいっぱいだ。

「おばあちゃん、今日のプリンはレモンセージだね。あとローズマリーも」

「さすが、楓ちゃん。レモンセージは夏バテしないからね」

祖母は嬉しそうに目尻を下げた。

プリンを食べた後、土間にある階段で屋根裏に上がった。ここでは、屋根裏が私の部屋だ。部屋の前に立つと、中から話し声がした、いやそんな気がした。

「誰？」

扉を開けると武蔵がいた。なんだ。武蔵か。

「楓。客だ」

武蔵はそう言うと言ったと本棚の方に向かって顎をクイと上げた。本棚には誰もいなかった。でも何か気配がある。武蔵は本棚の一点を見つめ、ある本を開くように私に言った。その本の表紙を開いた途端だった。



「美味でございます」

本から甲高い声が出た。思わず閉じた。

少し声のトーンが落ちたが、まだ誰かがそこから話している。今度はゆっくり表紙を開け、よく目を凝らしてみた。そこには一センチ大の虫が視えた。

武蔵は私の前に座り直し、両手を私の膝ひざに置いた。

「楓。ヤツは本の虫だ」

「えっと……。前に古い本を開くと小さい虫がいたことがあった。あれがそうかな？」

「そうだ。本に住んでいて文字を食べる虫だ」

よく見ると、虫は文字をなぞるように這はっていて、小さな口がモグモグと動いている。字を食べているといっても、虫が食べた後の文字が消えたり擦すれたりしてはいないようだ。

「さすが楓姫！ さすがは藤原家の姫様です！」

本の虫が、いっぱい字を頬張ほわはった口で言った。

（ん？ 姫？ 藤原家？ 私？）

「ごら！ 順番に話さないとわからないだろ！」

武蔵が眉間みけんに皺しわを寄せて、虫を威嚇いかくした。

「楓。楓は藤原道真公を知っている？」

「藤原道真？ 確か学問の神様だったかな？」

「そうだ。藤原道真公は学問の神様だけど、本の神でもあるんだ。道真公は世界最古の日記を自筆で書いたお方で、そこにいる虫は、その日記が書かれた千年以上前から、藤原家にお仕えしている『藤原家の本の虫』なんだ」

武蔵のつぶらな目が、私を見つめて言った。

「実は道真公の日記を守ってきたのが、藤原家直系の女方なんだ。今までは、楓の母上が継承者で、母上の前はおばあ様。この虫、今は母上に就ついているけど、もうすぐ楓に相続される。わかるかい？」

「要するに……。この虫さんと道真公の日記を預かればいいのね？」

私自身が確認するように武蔵に尋ねた。

「楓姫。もう一つ重要な役目がございますー！」

それまで黙っていた本の虫が声を張り上げた。



「日記の後半には、これからの世に起きることが少しばかり書かれています。そしてその予言通りこれから楓姫の戦が始まります」

虫がピョンピョンと跳ねている。

「藤原の女の宿命さ。楓はもうすぐ十六歳になるから」

武蔵はふうーっと大きな息を吐いた。

戦って何？藤原家の女性の宿命？

激しい頭痛と吐き気で意識が遠くなった。

はっと目が覚めた。目の前には見慣れた葦あしの天井で、私は屋根裏部屋のベッドの上だった。武蔵はベッドの下で丸くなって寝ている。

下の階へ降りると、野菜を抱えた祖母が外からちようど戻ってきたところだ。

「楓ちゃん、おはよう。よく寝られたかい？」

いつもの祖母の笑顔だった。祖母の作る朝食は、自家製パンにたっぷり生野菜だ。庭で採れたブルーベリーのジャムをパンに塗りながら、思い切って祖母に語りかけてみた。

「おばあちゃん、あのね。私、昨日変な夢みたの。なんか本の虫が出てきたの」

「あれ？ そうかい？ 楓ちゃん、十六だもんね。私にも虫、ついていたよ。

懐かしいわ」

「え？ おばあちゃんにもいたの？ 本の虫？」

「そりゃ、いたさ。藤原道真公の日記とね。うちは藤原家直系の由緒ある家だからね。藤原の女は十六になると虫がつくのさ」

「し、知らなかったよ！ ママもそんなこと言ってなかったし……。ねえ、おばあちゃんの時も戦があったの？」

恐る恐る聞くと、祖母はそれまで動かしていた手を止めて、遠くの方を見つめた。

「ああ、あったよ。私の時はね……。『本が縦書きから横書きになる戦』だった」

祖母の話によると、筆ひでと墨すみで書かれていた縦書きの本が、横書きになる戦だったらしい。



「その時はさ、大勢いた虫たちが、自分たちは縦移動しかできないから横書きされた文字は食べられないと、そりゃあ反対してさ」

祖母の声は徐々に力が入ってきた。

「当時の日本の人たちも横書きの本は嫌いよ、本を読まなくなりかけてね。人が本を読まなくなると虫が絶滅するだろう？ 本がなくなる寸前でね。だから本当に大変だったのよ」

「ねえ、ママは？ ママの戦は？」

「楓のママの時は、確か……『本が手書きから印刷になる戦』だったね」

祖母は、手書きの本が活版印刷に変わった時の話を語り出した。手書きから鉛でできた文字を一文字ずつ拾い、組み合わせた版の出っ張っている部分にインクを付け、紙にインキを転写する印刷に変わったことを。

「あの時もさ、本の虫たちが『手書き以外の本なんか食えるか！』って。当時の日本人もインクの本は臭いからと敬遠してね。これまた人が本から離れる大ピンチだったのよ。楓ちゃんのパパ、活版印刷を発明した人に会うために、十六でドイツまで行ったのよ」

祖母は思い出しながら話した。結局、ママが虫たちにどうやって活版印刷のインク文字を食べられるようにしたのかは、言わなかった。

「楓ちゃんの戦もきくと大変。でも大丈夫よ」

祖母の顔が、なぜかとても神々しかった。

（藤原家直系の女性が背負う宿命。）

一、藤原道真公の日記を次の世代に渡せるよう守ること。

二、日記にある戦に立ち向かうこと。＝本の虫を守ること

私は部屋に戻ると、ノートに書いてみた。改めてこうやって字面で見ると、現実離れしていて信じられない。

「新刊の文字もこれまた美味でございますー！」

本の虫は、学校から借りてきた本の文字を、□いっぱいに頬張っている。

「楓。そろそろ準備をしよう」

武蔵がそう言うと、母屋の裏にある蔵に私と本の虫を案内した。蔵に入るのは初めてだった。外の暑さとは打って変わり、ヒンヤリとしていてどこか



蔵くらかな感じがした。目が慣れてきてよく見ると、蔵の中は本だらけだった。天井まで届く高い棚に、ぎっしりと古書が積まれていた。

武蔵は蔵の一番奥に案内した。そこには、壁に沿って一面の木製の扉があった。武蔵に促され、その古くて固い扉を開けると、暗闇の中に鋭く光る長方形の黒漆箱があった。箱には、金箔で梅の紋が美しく彫られていた。

「藤原家の家紋だよ。開けてごらん」

武蔵に言われて箱を開けると、巻物があった。道真公の日記らしい。色褪せた紫紐をゆっくり引つ張り、端から広げた。紙が古くて、破けそうで怖かった。巻物に書かれた字は、達筆な崩くずし文字で、私には読めなかった。

「ねえ、私の戦ってどこに書かれているの?」

武蔵が肉球を紙のある一点に置き、しばらく黙読してから、私に読んでくれた。

「『未知の字が人類を征服し、文字と本を必要としない時代がくる』ってある。虫がヒーツと声を上げ、悶絶もんぜつしはじめた。

「ま、誠にござりますか? 文字も本もなくなれば、我々は死んでしまいまする!」

はあ? 本がなくなったら私も困る。それに『未知の文字』って何だろう?

「楓。家臣を集めている。皆で考えよう」

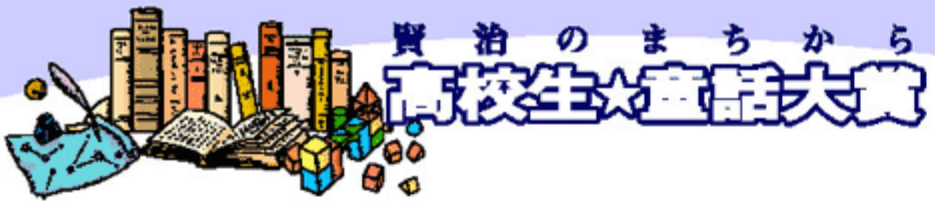
武蔵はそう言うと、大きな深呼吸をして天に向かって、低く太い声で長く吠えた。その姿は日本犬なのに、まるで狼のように見えた。

蔵に静寂が戻り、間もなく背後に気配がした。振り返ると見知らぬ瘦やせた初老の人がいた。

「只今参上ただいましました。藤原の姫。何なりと」

初老の人は膝ひざについて頭を垂れた。その後も続々と、気配がないまま気づくと背後に人が現れた。彼らはそれぞれ簡単に自己紹介をした。年齢も性別も見た目も全く共通点のない人たちだった。藤原家の家臣まつえいの末裔まつえいという以外は。

国語教師や古書店の主人。お寺の住職や出版社で編集をしている人からジャーナリストまでいた。皆、文字や本に関わる仕事をしているらしい。でも



不思議なことに、なぜかこの人たちに初めて会った気がしない。いつだったかどこかで会ったけど思い出せない、そんな懐かしい感覚がした。

「みんな、よく来てくれた。これから作戦会議を始める。まず日記にある『未知の文字』が何か？を解読しよう」

武蔵が家臣たちに日記を見せながら言った。

「参ったね。未知の字って、見たことない知らない字ってことだろ？見当がつかないよ」

古書店の主人が言った。

「文字を必要としないって音声文字のこと？」

「あれは声を自動で文字にするやつだろ？ 文字にさえなれば、虫は食えるぜ」

国語教師と編集者がお互い話している。

「未知の文字。未知の文字……」

ただ念仏のように唱えているのは住職だ。

「もしかして……。文字を使わない情報手段って、メールやソーシャルネットワークで使う絵文字やスタンプのことじゃないか？」

ジャーナリストがぼつりと呟いた。

「なるほど。あれなら、文字を使わなくても情報や気持ちを伝えられるな」

武蔵が言った。そして、私は気分が悪くなった。よりによって私の戦の敵が、絵文字？

「楓姫。私にはわかりかねますが、姫様はご友人方とその『未知の文字』とやらをよくお使いになられるのではございませんか？」

住職が丁寧ていねいに尋ねた。

「私。実は、そういうの使わなくて。むしろ嫌いなもの。だからあまりよくわからなくて。」

そこにいた皆が、溜息ためいきと共にお互い顔を見合わせ、黙り込んでしまった。

「しかしながら……。戦に勝つためには、相手を知ることです。姫様は苦手かもしれませんがやってみませんか？ 私たちも全身全霊、姫様に尽くしますので」

初老の古書店主がやっと口を開いて言った。

それから自分の部屋に戻り、何度も考えた。



友達と距離を感じた原因である絵文字やスタンプ。使いこなせないうちに、使えなくなつて、そして嫌いになつた。

未知の文字は、私にとって最大の敵だ。

「紙の文字でないものは口にできませんね！」

虫が目を三角にして、ふて腐れて言った。

「『蓼食たてつものも好き好き』と言うだろ？ 好き嫌いせずにもまず食ってみろよ」
武蔵が虫に吐き捨てる。

「それにさ。楓もだ。学校で、いじめにあっているんじゃないかと、本当は楓が友達に距離を置いていた途端とたんに、お腹の底から怒号どごうの波が押し寄せた。」

その言葉を聞いた途端とたんに、お腹の底から怒号どごうの波が押し寄せた。

「む、む、武蔵に何がわかるのさ？ 私だっているいろいろ大変なんだから！」
私はその場でうずくまり、溢あふれ出る涙を拭ぬぐった。学校から逃げたくてここに来たのに、やれ宿命だの信じられないことばかり。どうしていいのかわからない。武蔵も虫も、私が立ち上がるまでひたすら待っていた。

「ああ、もう！ 変わつてやる。何もかも！」

今度は全身をバネのようにのけぞつて、大きな声で叫んでみた。私は決心した。

「武蔵。本の虫。私は戦うよ。絵文字だって、スタンプだってやってみる。絶対に負けない」

それから私は、長らくしまいでいたスマホを引っ張り出した。まずは、同じクラスで図書委員の薫に連絡してみることにした。

「用もないのに何て送ればいいのかな……」

もう三十分も考えているが思いつかない。

「用事など必要ありませんよ。近況を尋ねてみるだけでいかがでしょうか？」
国語教師が手助けしてくれた。なるほどね。

（こんにちは。藤原楓です。毎日暑いですが、貴女はいかがお過ごしでしょうか？）

住職が私に代わって打った。でもすべ「固い」とか「絵文字がない」と皆に却下きりかへされた。

（毎日暑いね）太陽マーク（どじしてゐる）



ジャーナリストが打ち直した。こんな内容で、果たしていいのだろうか。そうこうするうちに、虫が送信ボタンを押してしまった。私にこっぴどく叱られた虫だったが、薫からすぐに返信が来た途端に、得意顔になった。

(ホントとろけるね(アイスクリーム)宿題がヤバイ(がい骨)楓、終わった?)

あんなに緊張していた心が一気に和らいだ。たった数文字と絵だけど、顔を合わせて話しているように薫を近く感じた。それから薫とは、その日数往復メールを交わした。頑張って絵文字も使ってみた。その様子を家臣たちは、じっと見つめていた。

「楓姫。お見事でございます。未知の文字を使えたではございませんか」
古書店が優しく言ってくれた。

その後も薫とのやりとりは続いた。メールを打つ前は、あれこれ余計な考えが先行していたけど、今はあまり考えなくなった。それに絵文字やスタンプも、長々と文字を手打ちする労力を省き、感じたイメージを瞬間的に伝える有効なツールだということにも気づいた。

「最後はお前さんだ。どうするつもりだい？」

武蔵が本の虫に穏やかに尋ねた。

「お前さんたちは、今までも戦のたびに何かと抵抗してきたけど、楓はやつたぜ」

「嫌なものは嫌なこった！ 絵文字なんか不味いに決まってる。そんなもの食えるか！」

苦虫を噛み潰した顔で、虫はわめいている。

「ねえ……。本の虫。聞いて。私ね。人は本を読まないで退化すると思っただの。考えることをしなくなるというか」

空虚な学校の日々を思い出していた。

「それに友達は、本だけでいいと思っただの。でもここで過剰して、皆で戦の作戦立てたり、話をする中で気づいたの。私、本当は本を通して、人とつながりたかったんだって」

自分でも声が震えているのがわかった。

「絵文字やスタンプ使うために、仕方なく薫にメールしたけど、今は早く薫に会いたい。人とのコミュニケーションも本も、時代と共に変わるんだよ。」



だからお願い……。縦書きから横書きの文字、食べられたんだよね？ 墨からインクの文字、食べられたんだよね？ それなら絵文字やスタンプも食べてみてよ！」

虫は大きなため息をついてソップを向いた。

「あーあ。藤原の姫様は、いつも虫も殺さない顔で大胆なことばかり！ 仕方ありませんね。楓姫が変わろうとしているのですから……」

住職が合掌がっしょうしてつぶやいた。

「これぞ飛んで火に入る夏の虫。ですな？」

全員、笑った。外ではヒグラシが懸命に最後の仕事を終えようとしていた。

夏休みが終わり、日常の生活に戻った。

学校では、薫と沢山話をした。メールでは語れなかったことをいっぱい。でも私の戦はまだ終わっていない。未知の文字である絵文字やスタンプを使えるようになった私と、食べられるようになった虫は、家臣たちと共に「本を必要としない時代」に立ち向かわないと。

私は集落の古民家に声をかけ、空いている場所に本棚を設置し、家臣たちが集めた本を置かせてもらった。薫や友人たちが、家庭で不要になったソファーを持ち込んでくれた。

集落の住民だけでなく、若者や子育て世代、高齢者など様々な世代が集まるコミュニティスペースとして、本が活躍できないかと考えた。ゆっくり本が読めて、皆が思い思いの時間を過ごせる憩いじいの場を作る。そうすれば本を必要としない時代なんて来ないはずだ。

祖母の家では、祖母の自慢料理とスイーツを出すブックカフェを開店した。新米店長の私は、接客が苦手なので失敗ばかり。でも以前の私より、私は私が好きになった。時々店を手伝ってくれる薫や友人たちと家臣たちと武蔵。大好きな人たちと本に囲まれた空間。

藤原道真様。

戦は始まったばかりですが、藤原楓は、これからもこの人たちとここで本を守っていきます。だって私は「本の虫」だから。